

冬の教育研究発表会の振り返り

第1学年 図画工作科「いろ・いろ ゼリー」

授業者：西原有香莉

本実践の主張点

子どもの多様な活動を誘発する場を設定することや、造形的な視点の広がりに沿った題材配列をすることで、感性豊かに自分なりの意味や価値を模索する姿が促され、創造活動への高まりが見られるだろう。

1. 授業づくりの「しかけ」と子どもの自己調整

本時における授業づくりの「しかけ」

- ①多様な造形的な視点で捉えられる素材
- ②造形的な視点の広がりに沿った題材配列

本実践では、「共通事項」にも示される「色」の魅力に迫る題材であった。本実践の対象児は1年生であったことから、色の多様性への気づきをねらったものであった。色の多様性とは、色相や明暗などによる違いに加えて、素材による色の違いまでも含む。また、ゼリーの素材への関わりをより深めるために、造形的な視点の広がりに沿った題材配列を工夫した。本実践での題材配列は、以下のものであった。

図画工作科「きらきら・ゆらゆら ひかりのおくりもの」

水の入ったプラスチックカップを様々な場所に工夫して並べ、異なる活動による光の当たり方の感じの違いを知る。活動の場や空間を、自身が生み出した表現の課題に向けて選択できるような素材を養うと共に、水に光が当たった時の感じのよさなどの造形的な視点を培い発揮できるようにする。

図画工作科「いろ・いろ いろみず」

赤・青・黄の色水を混ぜ、色水あそびをする。また、できた色を様々な場や空間に並べるなどしながら、鑑賞の仕方を様々に試みる。色の多様さやおもしろさに関する造形的な視点を培い発揮できるようにする。

図画工作科「いろ・いろ ゼリー」

上記の題材配列と素材を設定することによって、見られた姿は以下のものであった。

2. 本時で見られた自己調整の姿

図1はゼリーを混ぜるにつれて、色に変化していくところのよさを味わっている様子である。異なる色の粒が小さくなって色が溶け合い、新たな色ができていく過程を観察し楽しむことができていた。

(自己調整の過程)

(気付く) 混ぜると色がたくさんできる！混ぜていく間に色に変化していくよ。どんどん混ぜるとどのように変わっていくのかな？

↓

(決める) これくらい混ぜるときれいかな？

↓

(動く) お気に入りの色ができた！他の色ではどうかな？



図1 色ができていく過程を楽しむ姿

また、新しい色をつくる時にはかき混ぜる必要があるという特性を上手く生かした色づくりをする子どもも見られた(図2)。この子どもは様々な色のゼリーをカップの中に入れていくことで、色の層をつくっているのである。この子どもは、色が隣り合うことによる感じのよさや、その色によって感じが変わることに気付いているのである。「ゼリーのパフェを作る。」と言いながら、見つけた表現の方法を試し続け、重ねる色を様々に変えることでその感じの違いを楽しむ様子が見られた。

(自己調整の過程)

(気付く) 混ぜなくても、色を重ねるときれい！色を組み合わせるといい感じだな。

↓

(決める) この色の次は、この色にして…この順番がいい感じ！

↓

(動く) この順番がきれい！他の色の組み合わせはどうか？



図2 色が隣り合うことによる感じのよさに気付く姿

図2の子どもが見つけたゼリーの特性を生かし、新たな色づくりをしていた子どもが見られた(図3)。図中左の子どもが、始めに無色のゼリーをカップに入れ、次に色のゼリーを上に乗せることできれいになることを見つけたのである。さらに、図3は、自身のつくり出した表現方法を右の子どもに共有している場面でもある。先述の方法でできたゼリーを「かき氷みたいになった。」と表現し、「きらきらしてきてきれい。」とも話していた。あまりかき混ぜなかったことによりゼリーが大きい塊で残っている状態や中に気泡が入っているゼリーの様子から氷を連想させたのだろう。さらに、カップを目線の高さまであげてゼリーを見ていたことにより、気泡に光が当たり輝く様子を観察できたことがうかがえる。この光に関する気づきは、題材配列による効果があったと考える。

その後も、透明ゼリーの上に違う色を乗せてそのよさを楽しむ姿が見られたことから、この子どもにとって、実感の伴った価値ある表現(または活動)となったことがわかる。

(自己調整の過程)

- (気付く) 混ぜなくても重ねてみるときれいだな。
- ↓
- (決める) 透明の上に色のゼリーを乗せてみよう!
- ↓
- (動く) これだけできれい! 他の色をのせるとどうかな?



図3 つくり出した表現方法を共有する様子

また、図3の子どもは、ゼリーができあがった後も、「海みたいな色完成!」とつぶやきながら、満足そうに眺める姿が見られた。また、「混ぜやんくてもいいな。」という言葉も聞くことができた。その様子を見ていた近くの場所で活動をしていた他の子どもが、「海みたいな色作ろう。」とつぶやきながら、同じ表現をし始めたのである(図4)。個の学びが影響し合い、創造活動の広がりや高まりが見られた瞬間であったと言える。



図4 個の学びが影響し合う姿

(自己調整の過程)

- (気付く) あの子のつくっていた海みたいな色きれいだな。
- ↓
- (決める) ぼくも海みたいな色をつくってみよう!
- ↓
- (動く) やっぱきれいだな。次は他の色ものせてみよう!

3. 成果と課題

本実践の振り返りは、タブレットを使用し行った。自分のつくった色を並べるなどの活動を行なった後、「いいな」と思った視点から写真を撮り、その写真を見ながら「いいな」と思ったことについて話し、録音する。図5は、ある子どもが、つくったゼリーを拡大して写真に撮ったものである。ゼリー以前の題材では、ここまで近付いて色を鑑

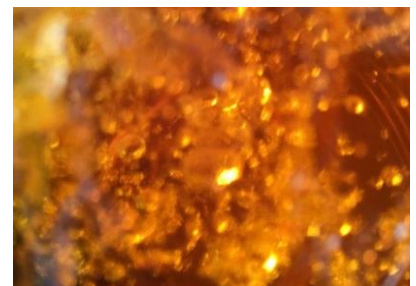


図5 ゼリーの写真

賞する姿は見られなかった。この写真を撮影した子どもは、この写真に関して「なんかきらきらして、すごいと思ったから。」と話していた。この発言の内容から、色だけでなく、その中に光る様子を捉えられていたことがわかる。

また、授業が終わった後にも残ったゼリーで色づくりをし、そのカップの中にある色の様子を熱心に伝えにきた（図6）。この子どもは、赤と青と無色のゼリーを混ぜ過ぎないことで、元の3色を残しつつ紫色の部分をつくっていた。さらに、そのカップを光にかざし、きらきらと様々な色が光る様子を見ていた。ここからは、ゼリーならではの色づくりやできた色のよさを多様な造形的な視点で捉えることができていることがわかる。

以上のような姿から、造形的な視点の広がりに沿った題材配列をすることが、子どもが多様な造形的な視点で目の前に起こっていることやものを捉え、創造的に活動していくことに、効果的であったことが考えられる。



図6 つくり出した表現を伝える様

また、授業動画内の終末に「おまけ」としてつけていた、次時のゼリーを並べる活動の中で、以下のような気づきを伝えにきた子どもがいた（図7）。

前は、1つの色だったら、普通のオレンジの色だけど、こうゆうAさん（図6の子ども）がやってたみたいにレインボーにすると、ここ（机に移る色）がこうゆうきれいな色になる。（机にうつっている色が）色の花火みたいになってる。でも、普通の色だったら、普通の花火になる。



図7 気づきを伝える様子

上記の発言をした子どもは、普段、黙々と自分の活動を進め自身の発見を伝えに来ることは少ない方である。そのような事実から、この子どもにとって“伝えたい”と思うほどの発見ができたことが、この時の様子からうかがえる。この発見は、設置していた場にゼリーを並べたことによるものである。光の当たる所に一定の距離で一列に並べたことによって、机にもカップの色が写って並び、上記のような気づき生まれたのだろう。このことから、多様な場において自分にとっての価値や意味の模索が行われていたと共に、自身がつくり出した学びのよさを実感していたことがわかる。

以上のように、造形的な視点の広がりに沿った題材配列やゼリーの素材が、多様な「気づく」を生み出し、自己調整を行いながら創造性を高めながら活動を展開していく姿が見られた。

一方で、協議会の中でご指摘があったように、色をつくる活動と並べる活動が分かれていたことや、机の色が赤いことからゼリーの色が違って見えたこと、活動への注意などによって、子どもの創造的な活動が制限されていたことが考えられる。実際に、「並べる」活動に移行する前に、「まだまだつくりたい!」といていた子どももいた。また、本題材以前の「いろ・いろ いろみず」の色水あそびでは、色を新しくつくりながら並べる色の順番を何度も変える子どもの姿があった。子どもは活動を何度も行ったり来たりしながら自分にとっての価値や意味を模索しながらつくり出す。そのような活動や姿を支える環境づくりの大切さを改めて感じた。

また、本実践では「色」へのアプローチとして題材を考えたが、「形」へのアプローチもできる可能性があるというご指摘もいただいた。この点においても、まだまだ、子どもたちの学びを深めていくことのできる題材であることを感じた。

本実践で明らかとなった成果と課題を、今後の実践にも生かしていきたい。